豆のつる　　リトアニア

昔むかし、あるところに、ひとりのお父さんがいました。

ある日、お父さんは、豆のいっぱい入ったざるをひっくり返してしまいました。お父さんは、こぼれた豆を拾って拾って、やっと拾い集めました。ところが、ひと粒だけ拾いわすれてしまいました。

ひと粒の豆は芽を出して、つるが長いすまでとどきました。奥さんがそれを見つけて、

「お父さん、お父さん。長いすをふたつに割ってくださいな」といいました。おとうさんは、長いすをふたつに割りました。すると、豆のつるは、割れた長いすのあいだからどんどんのびて、天井までとどきました。奥さんが、

「お父さん、お父さん。天井をふたつに割ってくださいな」といいました。お父さんは、天井をふたつに割りました。豆のつるは、割れた天井のあいだからどんどんのびて、屋根までとどきました。

「お父さん、お父さん。屋根をふたつに割ってくださいな」

お父さんは、屋根をふたつに割りました。豆のつるは、どんどん、どんどん大きくなって、どんどんのびて、天までとどきました。

「お父さん、お父さん。天をふたつに割るように、神さまにお願いしてくださいな」

お父さんは、神さまにお願いしました。すると神さまは天をふたつに割ってくれました。豆のつるは、どんどん、どんどん大きくなって、天の中までのびていきました。

「お父さん、お父さん。天によじ登って、神さまに会いにいきましょうよ」

お父さんは、豆のつるをよじ登っていきました。奥さんがあとにつづきました。ふたりは、登って登って登って、とうとう天に着きました。

神さまは、ふたりを案内して、天をあちこち見せてくれました。

夜になると、奥さんが神さまにいいました。

「神さま、神さま。あたしたち、どこで寝たらいいでしょう」

「かまどの上で寝なさい。でも、わたしのごたまぜ料理を食べるんじゃないよ」と、神さまはいいました。お父さんと奥さんはかまどの上に横になりました。

しばらくすると、奥さんがいいました。

「お父さん、お父さん。神さまのごたまぜ料理、食べてみましょうよ」

お父さんは、ちょっと食べました。奥さんもちょっと食べました。すると、あっというまにごたまぜ料理はお鉢から流れおちて、ぜんぶこぼれてしまいました。

朝になって、神さまがやってきて、お鉢が空っぽになっているのを見ました。

「おまえたち、わたしのごたまぜ料理を食べてしまったな。わたしの食べるものがなくなってしまったではないか。天から立ち去るんだ」

お父さんと奥さんは、一生けんめいあやまりました。すると、神さまはふたりをゆるしてくれました。

夜になると、奥さんがいいました。

「神さま、神さま。あたしたち、どこで寝たらいいでしょう」

「納屋へ行って、干し草の上で寝なさい。でも、わたしの馬車を乗りまわすんじゃないよ」

お父さんと奥さんは、納屋へ行って、干し草の上に横になりました。奥さんがいいました。

「お父さん、お父さん。神さまの馬車、ちょっぴりでいいから乗ってみましょうよ」

「おいおい、だめだよ。神さまに天から追いだされてしまうよ」と、お父さんはいいました。けれども、奥さんは、馬車に乗りこんで、そこらへんを乗りまわしはじめました。

馬車は飛んでいって、どうやってもとまらなくなり、こわれてばらばらになるまで走りまわりました。

朝になって、神さまがやってきて、馬車がばらばらにこわれているのを見ました。

「おまえたち、きのうはわたしのごたまぜ料理を食べてしまうし、きょうは、わたしの馬車をこわしてしまった。さっさと天から立ち去るんだ」

お父さんと奥さんは、また一生けんめいあやまりました。すると、神さまは、

「許してやるのも、これが最後だぞ」といいました。

夜になると、奥さんがいいました。

「神さま、神さま。あたしたち、どこで寝たらいいでしょう」

「果物畑へ行きなさい。でも、わたしのりんごを食べるんじゃないよ」

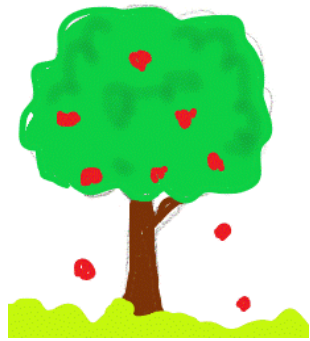
お父さんと奥さんは、果物畑へ行って横になりました。奥さんがいいました。

「お父さん、お父さん。神さまのりんご、ほんのひと口でいいから食べてみましょうよ」

ところが、奥さんがひと口食べるか食べないうちに、りんごはぜんぶ下に落ちてしまい

ました。お父さんはびっくりして、奥さんの髪の毛を引きぬいて、りんごをひとつひとつ木に結びつけていきました。でも、奥さんの髪の毛をぜんぶ引きぬいても、たくさんのりんごをぜんぶ木に結びつけることはできませんでした。

朝になって、神さまがやってきて、りんごがまき散らされているのを見ました。神さまは、怒りました。



「おまえたち、天から立ち去るんだ。もう許してはやれん。ごたまぜ料理は平らげる、馬車はこわす、きょうは、わたしのりんごをまき散らしてしまった。さあ、大麦ののぎ*でなわを一本ないなさい。そのなわを伝って帰るんだよ。お父さん、おまえは奥さんをふくろに入れて、その袋を口にくわえて地上に運びおろすんだ。とちゅうで、奥さんになにをきかれても答えてはいけないよ。ふくろが下に落ちてしまうからな」

お父さんと奥さんは、なわをないました。それから、お父さんは、奥さんをふくろに入れて、ふくろを口にくわえ、なわをつたって下りていきました。おりていくあいだじゅうずっと、奥さんは、ふくろのなかから、

「お父さん、お父さん。もう半分まで来たかしら。もう半分まで来たかしら」とききました。お父さんは、ずっとだまっていました。

ちょうど半分までおりてきたとき、奥さんが、また、

「お父さん、お父さん、もう半分まで来たかしら」とききました。お父さんは、思わず、

「半分だよ、もう半分まで来たよ」といってしまいました。そのとたん、ふくろは下へ落ちていきました。

お父さんは、地上におりると、奥さんをさがしましたが、どこにも見つかりませんでした。

それからというもの、お父さんはひとりでくらしました。でも、そのほうがずっとよかったんですよ。

＊　のぎ　稲、麦などの実の殻（から）にある針状の毛。

資料　『世界の民話33リトアニア』虎頭恵美子訳／ぎょうせい

村上郁　再話